ぴっぴだより

No.4. 2022. 6. 29

冬の間のお休みを経て、今年も”色の時間”が始まりました。たった3か月顔を見なかった子どもたちたちの変化には、いつも驚かされています。

顔つき、身体の成長ももちろんですが、心の変化・周囲に対するかかわりや態度にも大きな変化があることを、こどもたちが描き出す色彩たちや、色彩を見る子供たちの態度を見て感じています。

先日の色の時間での出来事です。

A君は重なり合う色彩の様子を見ながら繰り返し色を重ねていました。重なり合う色に次々と色を加えていくので、画面には濃い紺色の世界が広がっていました。そして次にAくんはその紺色の世界に黄色をちりばめていきました。それはまるで深い海の中できらめく光のようであり、同時に星がきらきらと瞬いている宇宙の中に放り出されたかのような様子でした。とてもきれいでした。A君もその色彩の世界の中に入り込み、心いっぱいに体験しているのがよくわかりました。

私はその美しい瞬間を、完成されたものとしてとどめておきたいという思いから、”A君、そこで終わりにしましょう…”と言いそうになりました。が、そこはグッとこらえました。

A君はその美しい世界に、”わーきれい！”と言った後、何の躊躇いもなく次の色をぶちまけました…。私は内心”ああー…涙…”となってしまいましたが、次の色彩の様子も、前回に劣らず美しく響きあっていました。そしてA君は再び”わ～きれい！！”としばらく感嘆したのちに、また次の色を重ねていき、それを繰り返し続けています。

そんなA君と、A君が作り出している色彩たちの響き合いをみながら、私の中である描写が思い出されました。ミヒャエルエンデ作の「モモ」の中に出てくる”時間の花”の場面です。

「モモ」は、モモという名前の小さな女の子が“時間泥棒”から盗まれた時間を取り戻すお話なのですが、その中でモモが時間を司るマイスターホラに時間の生まれる場所に案内してもらい、時間の花と出会うとても美しいシーンがあります。少し抜粋してみます。

～星の振子はいまゆっくりと池のへりに近づいてきました。するとそこのくらい水面から大きな花のつぼみがすうっとのびて出てきました。～それはモモが一度も見たことのないほど、美しい花でした。まるで光り輝く色そのものでできているようです。このような色があろうとは、モモは想像さえしたことがありません。～モモはその光景にすべてをわすれて見入りました。～やがてまた振子はゆっくりゆっくりもどっていきました。そして振子がわずかずつ遠ざかるについて、おどろいたことに、その美しい花はしおれはじめました。～モモは二度と取り戻すことができないものが永久に消え去ってゆくのを見るような、悲痛な気持ちがしました。

～ところがその時には池の向こうがわに、またべつのつぼみが暗い水面から浮かびあがりはじめているではありませんか。
～今度の花は、さっきのとはまったくちがう花でした。やはりモモの見たことがないような色をしていますが、こんどの色のほうがはるかにゆたかで、はなやかな気がします。
～見ているうちにモモはだんだんとわかってきましたが、新しく咲く花はどれも、それまでのどれともちがった花でしたし、ひとつ咲くごとに、これこそ一番うつくしいと思えるような花でした。
～モモは花がつぎからつぎへと咲いては散ってゆくのをながめました。いつまで見ていてもみあきないながめです。

「モモ」岩波少年文庫　P242～P244 抜粋

新しい世界が現れては消えて、また新しい世界を創造していく。生まれては消え、消えては生まれるを繰り返し、その瞬間瞬間をとどめておこうとせず、去っていくものを惜しがることもなく、また次の新しい瞬間に、色彩の美しい響きに喜ぶＡくんの様子が、”時間の花”に出会うモモの姿と重なっていました。

時間の源、美しい時間の花を見て戻ってきたモモは、マイスターホラに聞きます。

「でも、あたしが行ってきたところはいったいなんなの？」
「おまえじしんの心のなかだ。」

「モモ」岩波少年文庫　P244 抜粋

子どもたちの絵は評価できるものではありません。上手に描けたとか、上手に描けなかったとかは、全くどうでもよいことなのです。大切なのは、色彩との出逢いであり、色彩と戯れ、遊び、体験することです。
まつぼっくりさんでは、ただただ色彩と友達になることから始めますが、くりさん、おおくりさんと成長していくにつれて、体験している色彩の中に”美しい”という感覚が芽生えてきます。それはモモが出逢った時間の花が、実は自分の心の中で起きていることであるのと同じように、まさに子どもたち自身の内的な”美しいもの”との出会いの体験でもあるのです。

Ａ君はお昼の時間になっても一人絵を描き続けていました。そしてそれを見守るぴっぴの森。そんなＡ君を見ながら、私自身も子どもたちを通して、ぴっぴの森を通して沢山の気づきをいただけていることを改めて実感していました。

：小林郁絵

森のいきもの子育てばなし　7月

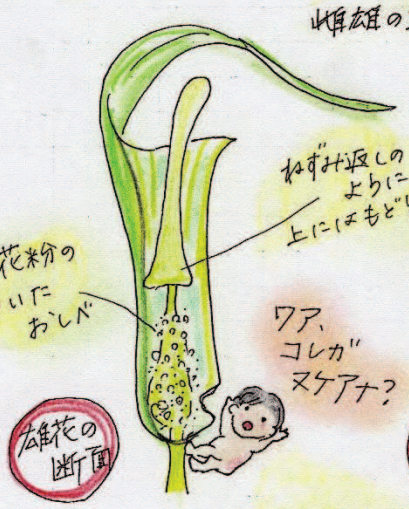
ぴっぴの森や周辺を歩いていて、不思議なたたずまいのこんな花→（花なんです！）をみかけたことはありませんか？
5月の中ごろから右図のたけのこのような姿で芽をだし、（これもかなり怪しいたたずまい（笑））、その模様がマムシに似ているので名前を「マムシグサ」といいます。
花もそういわれるとヘビが首をもたげているようにみえなくも…？
ということで今月はこの不思議なマムシグサのことについてお話していきたいと思います。子どもたちはよく知っていますのでぜひ一緒に探してみて下さいね！：菜々恵

《マムシグサのひみつ》

花には♂と♀があります。
断面でみるとよくわかるのですが上からのぞいても、側面の穴でも雌雄の違いがわかります。

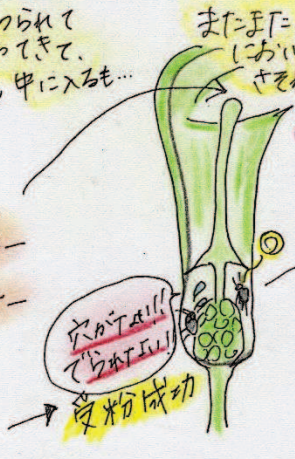
（マムシグサはキノコバエという昆虫が花粉をオスからメスの花に運んでいくことによって受粉でき、秋にこれまたインパクトのある姿と色の実ができます。加えて、実は性転換もして子孫を残そうとしています。）

これはいつかまたくわしく～♪



その結果

実は美しいですが有毒！です。
シュウ酸Caが含まれ、口の中がしびれちゃう!!
でも、鳥は食べるのです～不思議…



私は、1つのメスの花の中でキノコバエが3匹ほどおちくたり（涙）になっているのをみたことがあります…。

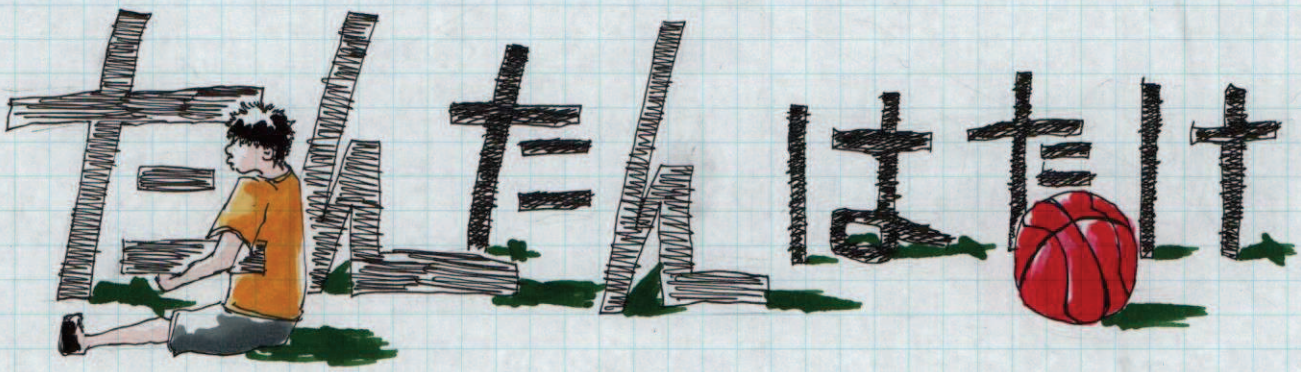
お天気の様子を伺いながら、いつできるかなかなか決められなかった田植え予定でしたが、この日にできてよかった！と思えるような気持ちのよい晴天の中、無事今年も植え終わることができました。ありがとうございました！

あれから4週間、少し大きくなった稲たち。のあいだに、植えた覚えのない草たちの姿…
放っておくと、稲よりあっという間に背が高くなってしまったり、繁茂して勢いが止まらなくなってしまいます。
その草たちを、手や熊手のようなもので こしょこしょと浮かせたり、抜いたりする草取りが始まりました。

今は稲よりも小さい草がほとんどなのですが、抜くと、

塊茎（栄養分を貯蔵して栄養繁殖を行う役割）がいっしょについてくる草があります。この塊茎つきで草が抜ける（途中で切れずに）と、『よしっ！』と嬉しくなるのです。なにせ見るからに強そうなのです。植えてもいないのに、生きる気満々で現れて、あっという間に成長する草。その大元に触れると、たくましさに感心して、こちらが元気になる気がします。塊茎だけでなく、地上部に対してびっくりするくらい根っこの長〜い草たちも。スーッと抜けるとこれまた嬉しい。草に触れ、水に触れ、土に触れ、心地よく田んぼ作業ができているこの頃です。暑さに気をつけつつ…草が小さいうちに…

畑には、くり、おおくりのみんなと大豆の種まきに行ってきました。少しですが玉ねぎの収穫もして帰ってきました。
6月のいろいろな作業もありがとうございました！



《お知らせ》

6 月は一日一日、どんぐりさんの朝の涙が落ち着いていき、大好きなお父さんやお母さんとお別れができました。自ら「バイバイ！」と手を振る姿に、おうちの人ではない人々に安心感を持ち、自分の足で一歩踏み出す「覚悟」を感じます。決断するのは本人だけれど、保育者だけではなく、おおきい子どもたちの寄り添う気持ちやゆったりした時間が、ちいさい人たちを包み込み、「覚悟」を決めているように思います。

ある日、カエルが泳いでいる水溜まりのお風呂を覗き込んでいた朝光ちゃんの帽子が水の中に落っこちました。水の中にいた千秋ちゃんが「ど〜ぞ」と拾い上げると、朝光「濡れちゃた〜！」と珍しく大声で泣きました。お日さまに乾かしてもらうことにして、午後、乾いた帽子を手渡すと、朝光「あさひは、もう泣かない！」2 歳児の覚悟に涙が出そうになります。

今のおおくりの奏空くんと周くんががまつぼっくりの時に、二段ぶらんこの上に乗っていたくりさんの姿に刺激され、何度も挑戦し、そのくりさんも一生懸命にあったかい手助けをしましたが乗れませんでした。奏空「4 歳まで待つ！！」周「周も 4 歳まで待つことにする！」二人の「覚悟」に感動しました。そして憧れていた 4 歳になって直ぐに挑戦した奏空くんはまだ乗ることが出来ずに大泣きしました。そしてその何日か後、乗れた時の喜ぶ姿はまぶしかったです。

おおくりキャンプでは毎回ドラマがあります。大喜びしている人たちだけでなく、「行かないことにする」と宣言する人もいます。中澤「わかった、無理しなくていいよ。でもまだまだみんなで楽しいことを考えていくから、ゆっくり決めていこうね」。日を追うごとに「行くかもしれない」「行けそうな気がしてきた」「〇〇、やっぱり行く！」どんな心動かす言葉があるだろうかと考えられる保育の仕事が面白い！

キャンプ当日になって、「おやつを食べたら帰る」と言う子どももいます。中澤「わかった。おやつ食べたら帰ろうね」そして「ご飯食べたら帰る」「お風呂入ったら…」となかなか帰りません。子どもたちの決断を大切にしながらの一つ一つですが、子どもの「覚悟」に出会う時、その「覚悟」を一緒に大切にしたいと思います。小さな変化をだいじにしたいと思います。だから、おうちの方々に「子どもたちのプログラムを先走って伝えないでくださいね」とお願いしています。子どもたちの「覚悟」をテーマに、論文を書けるのではないかと想いが膨らんでいます。

2022/5/31 発行のぴっぴだよりの訂正です。ぴっぴ在園者数を 163 名と書きましたが、178 名でした！

：中澤眞弓